

論文 ニダバ (*Nidaba*) 41(2012), 11-20

日本語とインドネシア語の文末詞の対照研究

Nuria HARISTIANI

1. はじめに

文末詞は旧来、日本語のような膠着語に繁栄しており、英語やインドネシア語のような屈折語や孤立語には栄えていないとされている（藤原 1990）。しかし、実際のインドネシア語の言語生活を見てみると、数多くの文末詞が認められ、様々な意味機能で様々な相手に対して用いられていることが現状である。

インドネシア語に文末詞が数多く存在していることは、インドネシア語の言語生活でも文末詞が重要であり、大きな役割を果たしていると考えられる。それにもかかわらず、インドネシア語の文末詞はこれまで取り上げられることがなく、先行研究もほとんど見当たらない。また、インドネシア人日本語学習者は、日本語の文末詞を教わる際に、インドネシア語には対応するものがないとの説明を受けることが多々あり、このこともインドネシア語における文末詞が検討されてこなかったことを示している。

こうした状況を踏まえ、本稿ではインドネシア語の文末詞を整理・分類し、その意味機能についての考察を行う。また、日本語の文末詞と対照させ、両言語の文末詞の相違点・類似点および特徴を明らかにする。本研究が、インドネシア人日本語学習者の一助になるほか、インドネシア語のような孤立語にも、なぜ文末詞が栄えているのかという問題についての考察の手がかりにしたい。

2. 先行研究

2.1 文末詞の定義

文末詞の本来的な機能はいずれも終助詞や間投詞に当たるものであるが、本稿では藤原氏が提唱した「文末詞」の名称および定義に基づき考察を行う。藤原（1990）は、文末詞について、文末にあって主情的な働きを強く見せるものであり、基本的には「訴え」の作用を表示するものであると定義している（文末詞の名称及び定義の詳細については藤原（1990）を参照されたい）。

2.2 インドネシア語の文末詞に関する研究

文末詞が発達している日本語及び日本語の方言における文末詞に関する先行研究は数多くあるが、インドネシア語における文末詞の研究はほとんど見当たらない。インドネシア語を含めて諸言語における文末詞を考察している研究には藤原（1990）がある。

藤原 (1990) 『文末詞の言語学』では、インドネシア語の文末詞として、「BUKAN」(～じゃない)、「YA」(はい)と「YABUKAN」の3語を取りあげている。これらの文末詞を説明したうえ、氏は、

インドネシア語における文末詞は極小の数しか属さず、転倒式のインドネシア語は日本語に見られるような文末詞の発達は見られないのであろう (p.152)

と指摘している。

本稿では、藤原の指摘以外にもインドネシア語には多くの文末詞が認められることを指摘し、日本語と対照しながらインドネシア語の文末詞を説明記述していく。

3. 本研究の方法

本研究では、資料収集にあたって、ネット上のチャットや内省に基づきインドネシア語の文末詞をリストアップし、抽出した文末詞を他のインドネシア語母語話者に確認したうえ、個人差や地域差が大きいと判断されるものを除外した。残ったものを本研究における「インドネシア語の文末詞」とし、日本語の文末詞と対照しながらその意味機能について説明記述していく。

4. 日本語とインドネシア語の文構造と文末詞

藤原 (1990) は、

文末詞とされるようなものが、表現の文末決定の文構造の、語順の末端に現われているのは、いかにも当然でありましょう。文構造の後部または末部に、文表現の主情性を支持する語要素の働かない(ならばない)言語にあっては、文末詞もまた存立していないはずとされるのかと考えられます (p.45)

と述べている。

インドネシア語は英語と同様に<S+V+O>の文構造を持ち、主要素が前部に現れ、表現したい部分が文の最初の部分に表される文構造である。次の例文を見てみよう。

(日) 「そこへ行くな (X) 。」

(英) “Don't go over there (X) !”

(イ) “Jangan pergi ke sana (X) !”

同語順

禁止 行くへそこ

3例文を比較すると、日本語では主要部の「禁止」である「行くな」における「な」は文の最後に来ているのに対し、英語とインドネシア語では、“Don't”または“Jangan”は文の最初に来ている。これらは、文表現の文末決定性(前者)と文初決定性(後者)の明白な例であろう。

これについて藤原(1990)は、日本語の場合は(X)の所に「よ」を付加して「そこへ行くなよ」とは言えるが、英語の場合は“Don't go over there!”の後に、表現者の主情を色濃く表す「X」を付けようとしても方途がないと述べている。しかし、インドネシア語の場合は英語と語順が同じものの、「X」のところに“Lho”などを付けることがで

き、”Jangan pergi ke sana lho!”と言える。“Lho”を付加した文は禁止することを念押しした発言となり、“Lho”は「行くなよ！」における「よ」のような機能を持つ。“Lho”の他にも、話者の訴えたい気持ちによって付加できる文末詞が数例存在すると考えられる。

以下では、インドネシア語で認められる文末詞と日本語の文末詞を形式的な基準に基づいた分類を行い、両言語の文末詞の類似点・相違点を明らかにしていく。

5. 日本語とインドネシア語の文末詞の形式的分類

文末詞の分類方法のうち、五十音図による分類や形式的な分類が多く見られる。形式的分類を採用することにより五十音図による特徴も指摘できるため、本稿では藤原（1982）及び町（1998）に従って形式的分類を採用する。

藤原（1982）は、文末詞を形式的に大きく二つに分けている。

1. 原生的文末詞 : すぐに転成を考慮することができない類のもの
2. 転成（転生）文末詞：他の品詞から転生した文末詞のことである（助詞から転生した文末詞は「助詞系転生文末詞」に当たる、など）（pp.43-47）

この形式的分類に基づき、日本語とインドネシア語の文末詞は次のようにまとめられる。

表1 日本語とインドネシア語の文末詞の形式的分類

文末詞の分類		日本語の文末詞	インドネシア語の文末詞
原 生 的 文 末 詞	<i>感声的文末詞</i>		
	「ア行」		
	「カ行」		Gih、Kek、Kok
	「サ行」	「サ」「ゼ」「ゾ」	Sih
	「タ行」		Deh、Ding、Dong
	「ナ行」	「ナ」「ネ」	
	「ラ行」		Lah ya、Lho
	「ワ行」	「ワ」	
	「ヤ行」	「ヨ」	
	「その他」	「ッケ」「ッテ」	
	<i>非感声的文末詞</i>	「カ」	
転 成 文 末 詞	<i>助詞系転成文末詞</i>	「ノ」	Aja
	<i>助動詞系転成文末詞</i>		
	<i>動詞系転成文末詞</i>	「シテ」「テバ」	
	<i>名詞系転成文末詞</i>	「コト」「モノ/モン」	
	<i>代名詞系転成文末詞</i>		Inih、Nih、Tuh
	<i>副詞系転成文末詞</i>	「カモ」	Apa、Dah、Juga、Kali、Lagi
	<i>感動詞系転成文末詞</i>		Ah、Bukan、Ih、Kan、Ya

本表から、インドネシア語の文末詞は藤原の指摘した3語よりも多いうえ、日本語と同様に、原生的文末詞と転成的文末詞に分類できることが明確になった。また、表1に基づき、両言語の文末詞の形式的分類による類似点を次のようにまとめることができる。

- 1) 日本語とインドネシア語では原生的文末詞と転成的文末詞がともに存在する。
- 2) 転成文末詞には種類によって同程度の数が存在する（日：4種類、イ：4種類）。
- 3) 両言語の原生的文末詞においては感声的文末詞がともに多く存在する。
- 4) 両言語の転成文末詞には助詞系転成文末詞と副詞系転成文末詞が栄えている。
- 5) 助動詞系・形容詞系転成文末詞は両言語ともに存在しない。

また、両言語の文末詞の相違点については以下の3点が挙げられる。

- 1) 日本語の原生的文末詞では感声的文末詞と非感声的文末詞が存在するのに対し、インドネシア語の原生的文末詞には感声的文末詞しか存在しない。
- 2) 日本語の感声的文末詞では五十音図別に見ると、「サ行」（3系）・「ナ行」（2系）が多く存在するのに対し、インドネシア語の感声的文末詞では「カ行」（3系）・「タ行」（4系）・「ラ行」（2系）というばらつきが見られる。
- 3) 日本語の転成文末詞には動詞系と名詞系転成文末詞が発達しているのに対し、インドネシア語では副詞系が発達している。

以上から、インドネシア語の文末詞は、日本語の文末詞と数量的に同程度存在しており、さまざまな品詞からの転成も見られることが分かった。また、表1で見られる通り、日本語のように文末決定性でないインドネシア語にも文末詞が栄えている一つの理由は、転成文末詞の繁栄にあると考えられる。換言すれば、文末詞の繁栄は文構造が第一条件とは言えない部分があると言えよう。また、一見インドネシア語の文末詞が日本語のそれより多いように見えるが、実際の日本語の言語生活ではより多くの文末詞が存在し、さまざまに派生形を作っていることも考慮する必要があるだろう。

6. インドネシア語の文末詞の意味機能及び使用対象者

上田（1997）では、ラオス語の文末詞を「疑問的表現」「命令・依頼的表現」「その他の表現」という機能に分け、「話し手の伝達姿勢」観点から考察を行った。また、上田（2002）は、使用頻度の高いクメール語の文末詞を取り上げ、肯定文・禁止文、質問文、肯定文・命令文のどちらかに文末詞が現れやすいかについて考察している。これらを踏まえ、本稿では表1で示した全てのインドネシア語の文末詞を機能別に大きく5つに分類し、各々の文末詞が使用できる対象者を表で示したうえ考察・説明記述していく。また、インドネシア語の文末詞には、同様の機能を持ついくつかの文末詞が存在するため、以下ではそれらの文末詞が与える印象は多少異なっても、同類の機能を持ち、お互い置き換えられる場合は一つの例文を取り上げて説明記述していく。また、原生的文末詞と転成的文末詞を区別するために、転成文末詞の場合は表内で（ ）の中に「原形」を記する。

6.1 疑問・確認を表す

疑問・確認を表すインドネシア語の文末詞を以下の表2に示す。

表2 疑問・確認を表すインドネシア語の文末詞

番号	文末詞 (原形)	意味・機能	使用対象者
1	Bukan (Bukan)	疑問緩和・確認	目上・同等・目下
2	Kan (Bukan)	確認	目上・同等・目下
3	Ya (Iya)	疑問・表現緩和・確認	目上・同等・目下

<a> “Bukan”、“Kan”、“Ya”

疑問・確認を表す“Ya” “Bukan” “Kan”は命題が真か偽かが分からない時に多く用いられる。一般にこれらの文末詞は「はい」・「いいえ」の答えを要求する質問文を作るとされているが、イントネーションによって答えを必ずしも必要としないこと、疑念を表したり、独り言で用いたり、受け答え文に用いたりすることもある。“Bukan”は本来、否定の助動詞として使われ、日本語の「違う」「～じゃない」に対応している。また、“Kan”は本来、“Bukan”の短縮形であり、その機能も“Bukan”と類似している。しかし、“Kan”が持つ主な機能は疑問ではなく「確認」であり、“Bukan”よりも砕けた表現である点で“Bukan”と異なっている。また、“Ya”は本来“Iya”(はい)から来ており、質問に対する肯定的な答えとしての機能を持つ。次の例文を見てみよう。

- (1) (病院で並んでいる初対面の中年女性との対話)

“Setelah ini giliran Ibu bukan?/kan? /ya?”

(この後、おばさんの番 ですか / (です) よね?)

例(1)における文末詞“Bukan” “Kan” “Ya”は、命題について確認したい気持ちを表すために用いられる。“Bukan”という否定表現を使うことは確認を婉曲的にし、それによって相手に対する配慮・丁寧さが表せるという機能も働いていると考えられる。一方、“Kan”を質問文につける場合は、発言内容が正しいである確信を少なからず持っている時に使われることが多く、場合によっては“Kan”を付加しない方が丁寧な表現となることもある。“Bukan”と“Kan”は下降調イントネーションで発話される場合は柔らかい確認となるが、上昇調イントネーションで発話される場合は怒り・批判・侮辱の気持ちを込めた確認の表明となる。

他方、文末にくる“Ya”は質問文に付けることが多いが、質問の押し付けがましさを和らげたり、相手に対する訴えかけを柔らかくする機能を持っている。親近感を表すと同時に、表現を柔らかくするため、初対面の人に対しては丁寧さを表すために多く用いられる。また、平叙文の末部に付く“Ya”は相手に対する注意・気付きの表明として機能することが多い。インドネシア語の文末詞の中には、公式的な場面で使用できる文末詞が少ないが、“Bukan”は“Ya”と並んで公式的な場面で常に使える文末詞である。

6.2 不満・批判を表す

批判・不満を表わすインドネシア語の文末詞には、意味機能の性質が異なるものがあるため、お互い置き換えられないものは別々の例文を提示しながら説明記述していく。

表3 不満・批判を表すインドネシア語の文末詞

番号	文末詞 (原形)	意味・機能	使用対象者
4	Juga (Juga)	不満	親目上・同等・目下
5	Sih	不満	親目上・同等・目下
6	Apa (Apa)	怒り・不満	同等・目下
7	Nih (Ini)	後悔・怒り・不満	同等・目下
8	Ih	批判	親同等・目下
9	Lah ya	批判・軽蔑	親同等・目下

(表中の文末詞の並列は、使用できる対象者が分かりやすいように、使用対象者との関係に基づき並べている。すなわち、ほとんどの相手に対して広く使用できるものから、より限定されている相手にしか使用できないものへという並列になっている。以下同様。)

 “Juga” “Sih” “Ih”

“Juga” は本来、“Saya *juga* pergi” (私も行く) における「も」の係助詞と同様の意味を持っている転成文末詞である。これに対し、文末詞としての“Juga” は不満を強く表す機能を持っている。

(2) “Kamu telat *juga/sih/ih*” (あんた遅刻したじゃんから。)

例(2)のように、3 文末詞は文句・不満を表す際に多用される。“Juga” は上昇調イントネーションで発話される際には怒り・強い注意表現となる。また、“Sih” を使用した文は「あなた(相手)のせい」という意図を強く訴える文となる一方、“Ih” は不満を表すほか、話者の嫌な気持ちや相手に対する侮辱、強い批判を表すためにも多用される。

<c> “Apa”

“Apa” は本来、「何」という日本語の疑問代名詞に対応しており、文頭に現れている。一方、文末詞としての“Apa” は文末に現れ、不満・強い怒りを表す機能を持つ。

(3) “Dia pikir dia itu putri *apa?*” (自分がお嬢様だと思ってん?)

例(3)のように、“Apa” の使用は相手に問いかけているのではなく、怒りの気持ち・不満を表し、悪口・文句を言うときに用いられる。直接相手に向かって発する場合にも使われるが、第3者についての悪口を言う場合にも多く使われる。

<d> “Nih”

“Nih” は本来“Ini” (これ、この) という指示詞から成り、普段は文頭に現れる。この“Ini” から転成した文末詞の“Nih” は、下降調イントネーションで発話される場合は相手や他人に対する不満ではなく、自分自身に対する不満表明となる。

(4) “Aku terlambat lagi *nih*” (また遅刻しちゃったよ。)

この“Nih” は話し手が置かれている好ましくない状況に対する話し手自身の残念な気持ち・後悔を表し、独り言の時に多用される。また、上昇調イントネーションで発話される場合は強い批判・怒り・相手や話題の人物のせいにする気持ちを強く訴える機能を持つ。

<e> “Lah ya”

“Lah ya”は、自慢げのうえ、相手を非難・軽蔑する時に用いられることが多い。

(5) “Kalau aku ga mungkin dapat nilai sejelek itu *lah ya...*”

(私ならそんな悪い成績なんか有り得ないわ)

本例のように、“Lah ya”が使われる文はほとんど他者（他者が置かれている状況・所有物など）と話者自身（話者自身が置かれている状況・所有物など）を比較する際に使われ、他者よりも話者自身（の状況・所有物）の方がより優れていることを表す・自慢する際に多く用いられる。

6.3 提案・勧誘・依頼・命令を表す

他人に何かを促す機能を持つ文末詞は以下のようにまとめられる。

表3 提案・勧誘・依頼・命令を表すインドネシア語の文末詞

番号	文末詞 (原形)	意味・機能	使用対象者
10	Aja (Saja)	提案・勧め	同等・目下
11	Dong	提案・自慢・願望/依頼・怒り・批判	同等・目下
12	Yuk (Ayo/Ayuk)	提案・勧誘	同等・目下
13	Dah (Sudah)	強い提案	親同等・目下
14	Deh	提案・勧め・決意の強調	親同等・目下
15	Gih	強い提案・命令	親同等・目下
16	Kek	ぞんざいな勧め・批判・皮肉	親同等・目下
17	Lah	提案・勧誘	親同等・目下

<f> “Aja” “Dong” “Yuk” “Dah” “Deh” “Gih” “Kek” “Lah”

以上の文末詞は“Aja” “Yuk” “Dah”を除いて全て原生文末詞の類に入る。“Aja”の本来の機能は「だけ」という助詞に相当している。標準語的には“Saja”であるが、より口語的であり、親しい人と話す際などは“S”を取り“Aja”と発音されることが多い。一方、“Yuk”は勧誘表現の“Ayo”（～ましょう）の短縮形の文末詞である。“Ayo”は普段文頭に出現するが、文末詞としての“Yuk”は文末に現れ、その機能は“Ayo”と同様に「～（し）よう」という「勧誘」を表す。“Dah”は“Sudah”の短縮形だと思われ、「もう」「既に」という時制を表す日本語の副詞に相当している。

(6) “(Kamu) pindah jurusan *aja/dong/yuk?/dah/deh/gih/kek/lah*”

(専攻を変えたら?/よう/よ)

文末詞の“Aja”と“Dah”はアドバイスをする時や、何かを勧める時に用いられる。助詞としての“Aja”は文末に来ることもあるが、文末詞としての“Aja”と区別するにはイントネーションによる違いが存在する。すなわち、前者は平調イントネーションで発音されることが多いのに対し、後者は上昇調イントネーションで発音されることが多い。

“Dong”はイントネーションによっていくつかの機能を担っている。(6)の文での“Dong”は、下降調イントネーションで発話される場合、「～をしてほしい」という相手に対する提案・願望表明となるが、上昇調イントネーションで発話される場合は強い命

令、または怒り・批判の表明となる。さらに、“Dong”を抑揚のある上昇調イントネーションで発音される場合は、「さすがの私」という強い自慢となり、別の意味合いが含まれている。

“Deh”は日常生活で最もよく使われるインドネシア語の文末詞の一つだと考えられる。相談に乗る時の励まし・願望・提案、または「～をしてほしい・しないでほしい」という相手を勧誘する時によく使われ、それぞれの機能に添ってイントネーションが微妙に違ってくる。“Gih”は平調イントネーションで発音する場合は提案・願望の表明であるが、上昇調イントネーションで発音する場合は強い命令を表わす機能となる。また、例文(6)で表す“Kek”の意味機能は、文句・非難・批判・軽蔑の表明である。一方“Lah”の本来は接尾辞であり、“V+Lah”の形式で用いられ、命令を表す機能を持つ。これに対し、文末詞としての“Lah”はそんな強い強調・勧誘・願望を表す機能を持っている。そんな強い強調として使用される“Lah”は上昇調イントネーションで発話されるのに対し、願望・依頼を表すための“Lah”は下降調イントネーションで発話される。

6.4 訂正を表す

表4 訂正を表すインドネシア語の文末詞

番号	文末詞 (原形)	意味・機能	使用対象者
18	Kok	訂正・自己弁護・言い訳・理由・反論	親目上・同等・目下
19	Lho	訂正・情報伝達・自慢	親目上・同等・目下
20	Ding	訂正	同等・目下
21	Lagi (Lagi)	訂正・弁護	同等・目下
22	Kali (Kali)	皮肉を込めた訂正	親同等・目下

<g> “Kok” “Lho” “Ding” “Kali” “Lagi”

表4内の“Kali”と“Lagi”は転生文末詞であるが、それ以外の3文末詞は原生的文末詞である。“Kali”は本来、日本語の「多分」という推測を表す助詞に相当している一方、“Lagi”は本来、「再び」「また」という意味を持つうえ、「～ている(最中)」「あと～」という時制を表す副詞として機能している。相手の発言を訂正、または反論する際に使用される文末詞は次のようである。

(7) “Ibu kota Jepang tuh Tokyo *kok/lho/ding!/kali/lagi...*”

(日本の首都は東京 だけど /よ)

例(7)での“Kok”は訂正になるが、その他にも“Kok”は弁解、または相手の発言に対する反論を表明するためにも用いられる。

(8) “Aku sudah kerjain PR *kok!*” (宿題はもうやったよ!)

この“Kok”は反論する時に使われることが多いため、“Tapi”(でも、しかし)と併用されることが多い。一方、“Lho”は例(7)のように訂正の機能もあるが、相手が知らない情報・気づいていない物事についての伝達・告知の機能も有している。

(9) “Dosen A pensiun bulan depan *lho*” (ね、A先生来月退職されるって。)

この“Lho”は話し内容と発音によって自慢げにとらえられる可能性があり、実際に自慢話をする時にもこの“Lho”が多用される。“Ding”を使用した文は、話者自身が言い間違えたことに気づき、自分でそれを訂正する機能を持ち、他の訂正表明の文末詞の機能と多少異なっている。また、“Lagi”と“Kali”は訂正のほか、イントネーションによって相手の間違いを皮肉っぽく指摘するためにも使われることが多い。

6.5 その他の機能

表 5 その他の機能を表すインドネシア語の文末詞

番号	文末詞 (原形)	意味・機能	使用対象者
23	Tuh (Itu)	指摘・告知	同等・目下
24	Ah	(決意の) 強調	親同等・目下
25	Inih (Ini)	軽い判断・理由	親同等・目下

<h> “Tuh”

“Tuh”の本来は“*Itu*”（それ・その）という指示詞であり、“Tuh”はその短縮形である。この機能から離れて、文末詞としての“Tuh”は伝達の機能を持つ。

(10) “*Dipanggil dosen tuh*”（先生に呼ばれてるよ。）

この“Tuh”は相手が気づかない物事を伝達する機能のほか、イントネーションによって相手に対する嫌味を表すためにも用いられる。

<i> “Ah”

“Ah”は感情をより強く相手に訴えるための機能を持っており、ほとんどの文に付けることができる。上昇調イントネーションで発話される場合は相手の発話内容を否定する際に多用されるのに対し、下降調イントネーションで発話される場合は自分の決心や判断、または単に思っていることを強調する際に使われることが多い。

(11) (いくつかの選択肢があって、一つを選ぶ時に)

“*Aku pilih yang ini aja ah!*”（これにするわ。）

<j> “Inih”

“Inih”は本来“*Ini*”（これ、この）という指示詞から転成した文末詞である。本来の機能から離れて、文末詞としての“*Inih*”は軽い判断の提供・理由付けの機能を持つ。

(12) “*Pulang aja, gurunya ga ada inih...*”（帰れば？先生来てないしね。）

以上インドネシア語の文末詞を説明記述した結果、そのほとんどの文末詞は率直に心情を相手に訴え、待遇的な機能を表すものが多いことが分かった。これは、町（1998）が言う「一文の待遇表現を収約する機能を有する」という文末詞の特徴を表していよう。また、インドネシア語の文末詞が使用できる対象者を見てみると、そのほとんどが同等、またはそれ以下の対人関係にしか使えないものである。このことから、文末詞がいかに口語的であり、率直に物事を言うために用いられているかが把握できると考えられる。

7. まとめと今後の課題

これまでの考察から、両言語の文末詞の類似点・相違点を以下のようにまとめられよう。

- ① 日本語とインドネシア語の文末詞は形式的分類によってともに形式的分類による原生的文末詞と転成的文末詞に分類できる。
- ② 日本語とインドネシア語にはともに転成文末詞が繁栄しており、この他品詞からの転成こそが両言語における文末詞の繁栄の大きな要因として捉えられる。
- ③ インドネシア語の文末詞は機能によって大きく分けて少なくとも5つに分類できる。
- ④ 基本的に同じ機能を持つインドネシア語の文末詞でも、微妙に異なる他の機能も持っているため、完全にお互いを置き換えられる場合がそれほど多くない。

本稿では、インドネシア語の文末詞の意味機能の記述に当たって、日本語の文末詞と比較する際、対応できる日本語のそれを訳文で提示することに留まっており、各々に対応する日本語の文末詞との詳細な比較はまだ行っていない。従って、今後は複合文末詞を含め、両言語の文末詞をより詳細に比較していく必要があるだろう。また、ある言語における文末詞の繁栄要因が必ずしも当言語の文構造によるものとは限らないということを本研究の結果から多少なりとも証明できよう。しかし、他の言語にも同様の現象が見られるか、または諸言語で主にどのような要因が文末詞の繁栄に影響しているのかという普遍的な傾向を明らかにするためには、より様々な言語を取り上げて検証する必要があるだろう。

付記：本稿は筆者が2010年度日本語学会中国四国支部大会で発表した資料の一部を加筆修正したものである。

<参考文献>

- 上田広美 (2002) 「クメール語の文末詞」『語学研究所論集』第7号、pp.35-48、東京外国語大学語学研究所
- 上田玲子 (1997) 「現代ラオス語の文末詞について」『語学研究所論集』第2号、pp.19-30、東京外国語大学語学研究所
- 西川寛之 (2009) 『日本語文末詞の研究：文構成要素としての機能を中心に』凡人社
- 日本語記述文法研究会 (2003) 『現代日本語文法4第8部モダリティ』くろしお出版
- 藤原与一 (1982) 『方言文末詞（文末助詞）の研究（上）』春陽堂書店
- 藤原与一 (1985) 『方言文末詞（文末助詞）の研究（中）』春陽堂書店
- 藤原与一 (1986) 『方言文末詞（文末助詞）の研究（下）』春陽堂書店
- 藤原与一 (1990) 『文末詞の言語学』三弥井書店
- 町博光 (1976) 「与論島朝戸方言の文末詞—資料報告—」『方言研究年報統一』
- 町博光 (1998) 「奄美諸島与論島朝戸方言のヤ行音文末詞」『日本語文末詞の歴史的研究』三弥井書店
- <http://www.okinawa-conference.uni-bonn.de/Machi.htm>